HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ジオパークでの保全活動における専門家と地域住民の協働のあり方 ： 北海道様似町・アポイ岳の事例から
Author(s)	津曲, 佐和
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士(文学)
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84573
Type	bachelor thesis
File Information	2021Tsumagari.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

令和 3 年度卒業論文

ジオパークでの保全活動における専門家と地域住民の協働のあり方

－北海道様似町・アポイ岳の事例から

北海道大学　文学部
人文科学科　人間システム科学コース　地域科学研究室
指導教員：宮内泰介
学籍番号：01182113
氏名：津曲佐和

目次

1 はじめに 3

1-1 研究の背景 3
1-2 研究の目的 3
1-3 研究の方法 4

2 様似町がジオパークに認定されるまでの経緯 6

2-1 日本におけるジオパーク普及への歩み 6
2-2 「社会教育の土着度」に貢献した図書館講座 7
2-3 ジオパーク認定を目指す 9
2-4 本章の小括 10

3 アポイ岳ファンクラブ 11

3-1 盗掘問題とファンクラブ設立 11
3-2 登山道整備 12
3-3 知識の蓄積 12
3-4 本章の小括 13

4 ジオパークのテーマと専門員たちが行っている取り組み.....15

4-1 ジオパークのテーマと 4 名の学芸員 15
4-2 ジオ　かんらん岩を分かりやすく伝える 15
4-3 エコ　高山植物の調査・保全 16
4-4 ヒト　町の歴史と今を生きる人々 17
4-4-1 歴史・埋蔵文化財 17
4-4-2 アイヌ文化 18
4-4-3 健康づくり 19
4-5 各分野の連携事業 19
4-6 本章の小括 20

5 ジオパークの取り組みから考える様似町の今後 21

5-1 後継者問題 21
5-2 町内に眠る人材の育成 22
5-2-1 町民の中にある意識の差 22
5-2-2 それぞれができることをする 24
5-3 町外の人材 25
5-4 「町民自身が語れる」ジオパークへ 25
5-5 本章の小括 26

6 結論 28

7 謝辞 29

8 参考文献・参考資料 30

1　はじめに

1-1　研究の背景

ある地域の自然・文化資源を丸ごとミュージアム化し、包括的に保全・活用を行おうとする試みとして、ジオパークやエコミュージアムと呼ばれるものがある。特別な展示物を収集しなくても、もともと地域にあるものを活かして展開するこれらの制度は、観光への貢献を期待して導入されることも多い。梶原(2014)は、1990 年代に流行した日本のエコミュージアムにおいて、専門家を排し住民主体で行われた活動が短期間の「体験」のみで終わってしまったこと、問い合わせ窓口や情報を集積する拠点がないために、リファレンス性の問題を抱えたことを指摘している。このことから、こうした活動の成功率を高めるには、拠点となる施設、知識を持った専門家、意欲のある住民といった要素が揃うことが重要であると考えられる。

和田(2005)は、住民参加型の取り組みの例として、大阪市立自然史博物館が行った市民参加型の分布調査を取り上げ、学芸員と住民有志が合同で調査を行うことで、人的資源の確保ができること、参加・貢献することにより市民が得られる充足感などといったメリットが得られることを示している。その一方、新規参加者が必要な知識を習得するためのプロセスに時間と労力がかかり、学芸員に別の負担がかかったことも指摘されている。したがって、住民参加の活動を行うにあたっては、単発で終わるのはなく継続的な活動を行うことが望ましいといえる。

敷田ほか（2006）は、地域の環境政策を例に専門家と地域の関わり方を「出前（ビジター）モード」「調査・研究対象モード」「一体同化モード」「解決力向上モード」の 4 つに分類し、一方的な知識提供や調査活動で終わるのではなく、地域が主体的に環境問題を解決できるよう、専門家が不足する知識を補うことで解決力そのものの向上を支援する「解決力向上モード」が望ましいとしている。ここで敷田らは、専門家と地域が対等な立場で関わることの重要性を強調している。

菊地（2014,2015）は、研究対象地域に住み問題解決のために尽力する「レジデント型研究者」が、地域住民と長期的な関係を築きながら情報を蓄積していくことで「地域内の協働を促進する」、「地域内と地域外をつなぐ知識を創る」といった、短期間の訪問だけでは困難な役割を果たしていることを指摘している。レジデント型研究者は、地域住民と長期的な関係を構築できる形態の一つであるといえるだろう。

1-2　研究の目的

今回調査を行った北海道様似町は日高山脈の南西に位置する人口約 4000 人の町で、全域がアポイ岳ジオパークの対象地域である。アポイ岳ジオパークは「ジオ・エコ・ヒト」の 3

つをコンセプトとしており、それぞれが「かんらん岩」、「高山植物」、「人々の歴史や生活」を表している。この地域は日本国内で最初にジオパークとして認定された 7 地域のうちの 1 つであるほか[1]、主に町民有志からなるアポイ岳ファンクラブを中心として活発な保全活動、地域学習が行われていることが特徴である。

本研究の目的は大きく分けて 2 点ある。1 点目は、住民が地域に存在する自然・文化資源を保全・活用する活動の中で、専門知識を持つ研究者が地域に関わることにより発生する地元住民との相互作用を検証することである。様似町には古くから地質や植物の研究者が訪問しており、現在でも世界各地から研究者が訪れる。また、ジオパークを目指していく過程で地質、植物、歴史、アイヌ文化という計 4 名の学芸員が配置された。彼らは町外から雇用されて地域に定住した専門員であり、いわゆるレジデント型研究者であるといえる。このように様似町には訪問型、レジデント型双方の研究者が関わっており、彼らと住民の間では活発な交流が行われている。これらの事例をもとに、専門家と知識量の多い住民の相互作用や、比較的知識の少ない住民への普及啓発活動などについて考察する。

2 点目は、将来にわたって持続的に活動を行っていくために必要な要素について考察することである。長期的に活動を行うにあたっては、参加者の数や質を高めていくこと、後継者問題など様々な要素を考慮しなければならない。様似町の現状や従事している方々の意見を踏まえ、継続的な活動に必要な要素を検討する。

1-3　研究の方法

本研究では、聞き取り調査を中心として、文献調査も併せて行った。聞き取り調査では、研究者、学芸員や後述するアポイ岳ファンクラブなど、アポイ岳ジオパークに関わる方々にお話を伺った（表 1）。

また、2021 年 10 月 19 日、アポイ岳の登山口から 5 合目までの範囲で行われたアポイ岳ファンクラブの登山道整備活動に参加した。この日の参加者はファンクラブ会員を中心とした 12 名で、この中には手伝いとして参加していた北海道庁日高振興局職員 2 名、様似町役場職員 1 名も含まれている。

[1] 様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会，(2012)，アポイ岳ジオパーク活動現況報告書 2009～2012　～日本ジオパーク委員会再審査認定に当たって～

表 1　聞き取り調査対象者（筆者作成）

番号	名前（敬称略）	居住地	主な肩書・立場	調査実施日
1	水野洋一	様似町	ファンクラブ会員、町議会議員	2021年10月16日
2	水永優紀	様似町	学芸員（植物）、ファンクラブ会員	2021年10月17日
3	信太富夫	新冠町	ファンクラブ会員	2021年10月19日
4	加藤聡美	様似町	学芸員（地質）、ファンクラブ会員	2021年10月20日
5	田中正人	様似町	ファンクラブ会長、元学芸員（植物）	2021年10月20日
6	田村裕之	様似町	ファンクラブ会員、役場職員	2021年10月20日
7	大野徹人	様似町	学芸員（アイヌ文化）	2021年10月21日
8	髙橋美鈴	様似町	学芸員（歴史）	2021年10月21日
9	橋爪伸恵	様似町	元ビジターセンター職員	2021年10月22日
10	内海絵美	様似町	図書館司書	2021年10月22日
11	新井田清信	札幌市	研究者(アポイ岳地質研究所所長)	2021年11月2日

なお、本研究では、様似町に関わる人々を、居住地とジオパークに関する知識量・関心度から図 1 のように大きく 5 つのグループに分類した。図右下の番号は表 1 の聞き取り対象者と対応している。今回の調査で聞き取りを行うことができたのは、比較的ジオパークへの関心度が高く、積極的に研究や学習活動を行っている A～C の層に限られている。

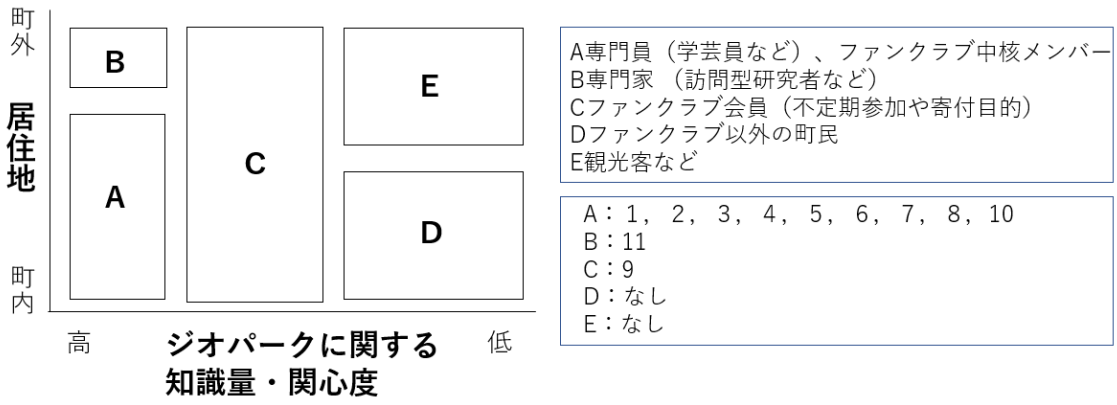

図 1 聞き取り対象者の分布（筆者作成）

2　様似町がジオパークに認定されるまでの経緯

2-1　日本におけるジオパーク普及への歩み

第２章では、日本においてジオパークがどのような経緯で定着していったのかについて触れた後、様似町がアポイ岳ジオパークに認定されるまでの経緯を整理する。

ここでは、渡辺（2014）や、日本地質学会に所属しアポイ岳ジオパークにも学術顧問として関わる新井田清信氏への聞き取りをもとに、ジオパーク制度の概要と日本各地にジオパークが広まった経緯を整理する。

ジオパークとは「地質学的重要性を有するサイトや景観が、保護・教育・持続可能な開発が一体となった概念によって管理された、単一の、統合された地理的領域」である[2]。地質・地形に関わる一種の公園であると同時に、地元の各種自然・文化遺産を保全すること、その価値を学び、教育することなどに関わる活動を、自治体や地域住民を中心としたボトムアップの組織で運営し、持続的な地域開発を目指すものである（渡辺 2014）。

一般的な博物館における教育活動が「館」の中で展開される一方、ジオパークは拠点となる施設を持ちつつも、「地域」全体が舞台になっている[3]。地域全体をフィールドとする点は 1990 年代の日本で盛んになったエコミュージアムとも共通している。両者の相違点としては、ジオパークの軸は地質であり、地質学的に価値のある対象を持つ地域に限定されること、地域内での運用前提で始まったエコミュージアムとは対照的に、ジオパークは当初より他地域との媒介としての役割を期待されていたことが挙げられる(梶原 2014)。

現在日本国内のジオパークは「世界ジオパーク」と「日本ジオパーク」に分かれており、それぞれは世界ジオパークネットワーク（以下 GGN）、日本ジオパークネットワーク（以下 JGN）に所属する地域である。日本国内で世界ジオパーク認定を目指す地域は、まず初めに日本ジオパーク委員会（以下 JGC）の審査を受け、JGN 加盟を目指さなければならない。JGC は JGN 加盟審査に加え、GGN 加盟を目指す地域へのアドバイスなどのサポートも行っている。

ジオパーク推進の核となる GGN は 2004 年にユネスコの支援により設立された。日本国内への本格的な普及が始まったのは 2007 年のことであったが、この時点でジオパークの概念を詳細に理解している国内の人材は非常に少なく、JGC、JGN のような組織も存在していなかった。そのため関係者が共に学びながらジオパーク制度の運営体制を確立していくこととなった。日本地質学会で評議会議長を務め、当時を良く知る新井田清信氏は次のように語った。

---

[2] 日本ジオパーク委員会　ジオパークとは，http://jgc.geopark.jp/whatsgeopark/index.html（2021 年 12 月 17 日閲覧）

[3] 2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。

世界では 2004 年だから。日本は必死になって日本地質学会で背負って、2007 年の冬に動き出して、2008 年に始めた。そういう意味で世界ジオパークよりちょっとたち遅れていて。日本ユネスコ、ユネスコの下に日本ユネスコっていうのがないと、世界ユネスコに、世界ジオパークにならない[4]。

2008 年 5 月に JGC が発足し、同年 11 月に島原半島、糸魚川、洞爺湖有珠山、室戸、山陰海岸、南アルプス、アポイ岳の計 7 地域を最初の日本ジオパークとして認定した。その後 2009 年に JGN が発足し、加盟地域同士で毎年の大会や年に 1-2 回程度のテーマを絞った研修会が行われている（渡辺 2014）。

同年 8 月には洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島が日本で最初の世界ジオパークに認定された。その後も増加を続け、2021 年現在、44 か所の日本ジオパークのうち 9 か所が世界ジオパークに認定されている[5]。

2-2 「社会教育の土着度」に貢献した図書館講座

様似町では、1952 年にアポイの高山植物が国の特別天然記念物に、1975 年にヒメチャマダラセセリが天然記念物に指定されたほか、ヒダカソウ、アポイマイマイなどように多種多様な固有の動植物が生息している。これはかんらん岩を主とする特殊な岩石が植物の生育に影響を与えているためであると考えられている[6]。

この町で地域学習が盛んになる大きなきっかけが、町立様似図書館の建設とそこで行われた図書館講座である。当時の町長はリーダーシップが強い人物で、反対意見を示す町民に対して図書館の必要性を説き続け、1992 年、町の人口に対して異例の規模の図書館が独立館[7]としてオープンした。また、専門員を重視する町長の意向で、司書の増員なども行われた[8]。学芸員はまだこの当時一人も配置されていないが、専門員を重視する現在の様似町の素地が生まれたきっかけの一つであると考えられる。

反対意見もある中で図書館が建設されたため、施設が町民にとって有意義なものとなるよう運用することが求められた。当時教育委員会に所属し、図書館の建設期から関連業務に携わっていた水野洋一さんは、図書館講座について次のように語った。

---

[4] 2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。
[5] 日本ジオパーク委員会　ジオパークとは，http://jgc.geopark.jp/whatsgeopark/index.html（2021 年 12 月 17 日閲覧）
[6] アポイ岳ジオパーク」公式サイトー北海道で登山・花を楽しめる大地の公園 ， apoi-geopark.jp（2021 年 12 月 19 日閲覧）
[7] それ以前に存在したのは、公民館のような場所に併設された「図書室」である。
[8] 2021 年 10 月 16 日、水野洋一さんへの聞き取りより。

国の特別天然記念物っていうものがどういうものか。国の特別天然記念物の価値。誰も知らない。町民は。で、それはさっき言ったように、知らなければ、知るような形をするべき。あるいはさっき言った、［平成の大合併で］様似町は今にもなくなる。まさにね、風前の灯。なくなるから、やっぱりなんかここで「ここに様似あり」みたいな感じで何かしないと、「そのまま黙って消えてくんですか？」と言って、やったのが図書館講座ってやつ[9]。

様似町には古くからかんらん岩や高山植物を目当てに研究者が訪れていた。テントを張って滞在していた彼らに講演を依頼したのが図書館講座の始まりである[10]。最終的には、一人 10 コマ程度の講座を開講し、単発の講演ではなく 1 年を通して学習活動が行われるようになった。水野さんは次のように話す。

図書館で、一年間通してどんどんどんどん図書館講座をやったというのは、図書館のやったことが最終的には後で、またいろいろ私にとっても様似町にとっても、ジオパークの最初のきっかけだった[11]。

また、同時期に野外図書館も開催された。これは、外に出て図書館の資料と現物を見比べながら行う学習活動である。こうした活動はジオパーク認定の頃まで図書館を拠点として続き、その後はジオパーク関連事業に受け継がれることとなる。

図書館講座の流れをくむ活動として、2010 年から続く「ふるさとジオ塾」がある（加藤 2018）。これは年に 10 回以上の頻度で開催されるもので、地域の人が講師になり、住民自身が地域について学ぶ学習会である。

また、様似町は 2002 年に行われた第 4 回国際レルゾライト会議の開催場所となった。これはかんらん岩を研究する世界中の科学者が集合する 100 名規模の国際会議である。アポイ岳ジオパークの学術顧問を務める新井田清信氏は、この規模の会議を運営した経験は様似町の土壌を示し、後に世界ジオパークを目指す上でも生きたのだと語る。

100 名の国際かんらん岩学会、レルゾライト会議っていうんだけど、学会は公民館でやった。そういう地域っていうのはめったにないんです。土壌がもうあるよっていって書いてるし。最初の報告じゃないかな？この地域の背景みたいな。人の活動とか[12]。

町の「社会教育の土着度」について、新井田清信氏は非常に高く評価し、次のように語っ

[9] 2021 年 10 月 16 日、水野洋一さんへの聞き取りより。
[10] 2021 年 10 月 16 日、水野洋一さんへの聞き取りより。
[11] 2021 年 10 月 16 日、水野洋一さんへの聞き取りより。
[12] 2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。

ている。

そういう人たちが町の将来も背負って、結構力のある人たちが支えてきたから、あの町はぼくの見る限り、社会教育の土着度っていうか、地域に根ざした、質から言うと、日本で代表的になっていると思う。小さな町なのに、社会教育に関わった人たちがね[13]。

このように、様似町では意欲の高い町民による地域学習が活発に行われ、かんらん岩や高山植物など、地域固有の自然資源に対する理解、関心が高まっていった。この時の参加者の多くは、後述するアポイ岳ファンクラブの中核メンバーとなっていく。

2-3　ジオパーク認定を目指す

こうした流れの中、図書館講座に講師として関わっていた新井田清信氏が 2007 年、ジオパークの概念を様似町に紹介した[14]。就任後間もない坂下一幸町長（当時）の賛同を得られたこともあり、「豊かで特色ある自然環境」を護り楽しむジオツーリズムを通じて、誇りある豊かな地域社会を作り上げていくため、申請に向けた準備が急速に進んでいくこととなる[15]。

当時について水野洋一さんは次のように語った。

ちっちゃい田舎だから、「こういう意識高い先生[新井田清信氏]がいますから」つって。町長とかなんかに会わせた。名刺交換。（中略）

「わかった。あの、ジオパークを先生、様似でもやれるってこと？」って言ったら、[新井田先生が]「やれるよ」と。で、それを町長に伝えた。直接。で、自分だけじゃなくて、その日に彼と 3 人ぐらい来たのかな。町長に会いに。地質学会があったから。で、そこで今度は私もちょっと作戦立てて、町長に会うときに。「あれ、これはもしかすれば大きなものになるな」ということで[16]。

坂下町長は記者会見を開き、ジオパーク認定を目指すことを宣言する。そこから急速に次準備が進み、アポイ岳ジオパークは 2008 年 12 月、最初の日本ジオパークのうちの一つとして登録されることとなる。また、拠点施設として 2013 年 4 月、レストランとして使われていた施設を改装した「アポイ岳ジオパークビジターセンター」がオープンした。この施設は、地質、植物の学芸員の拠点となっている。来館者はそれぞれの分野について展示解説で

[13] 2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。
[14] 2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。
[15] 様似町教育委員会，(2008)，日本ジオパーク認定申請書　アポイ岳ジオパーク, p 30
[16] 2021 年 10 月 16 日、水野洋一さんへの聞き取りより。

学んだり、アポイ岳の高山植物やヒグマなどの近況について情報収集を行うことができる。

日本ジオパークに登録された様似町は、すぐさま世界ジオパークへの登録を目指した。しかし 2013 年に JGC が行った世界ジオパーク推薦可否の審査では、ジオツアーの改善が求められること、先住民文化（アイヌ文化）など、地質と植生以外の要素が不十分であることなどから推薦が見送られた[17]。これを受けて、ガイド養成講座によるジオパーク公認ガイド制度の整備や人文系学芸員の増員、様似郷土館の展示リニューアルなどが行われ、「ジオ・エコ・ヒト」の 3 大テーマを擁する今のジオパークの形が整えられた。なお、ジオパーク公認ガイドとなった人の大半はアポイ岳ファンクラブ会員であった[18]。

こうした取り組みが評価され、アポイ岳ジオパークは 2015 年、世界ジオパークに認定される。

2-4　本章の小括

第 2 章では、ジオパーク自体の情報整理と、様似町で地域教育が行われた経緯、ジオパーク認定を目指した経緯について整理した。

ジオパークは地質を中心とした地域資源を保全し、持続的な活用を目指す取り組みである。「ジオパーク」と呼ばれるのは 2004 年に設立された世界ジオパークネットワーク（GGN）や、日本ジオパークネットワーク（JGN）に所属する地域であり、加盟には認定審査に通過することが必要となる。

様似町はアポイ岳のかんらん岩や高山植物をはじめとした豊かな自然資源と、北海道有数の歴史を持つ町である。こうした地域の宝を守りながらも町のために活かす取り組みとして、様似町はアポイ岳ジオパーク認定を目指し、「ジオ・エコ・ヒト」の 3 本柱が生まれることとなる。

次章では、アポイ岳ジオパークを運営するマンパワーとして必要不可欠な存在となっている組織、アポイ岳ファンクラブについて述べる。

---

[17] 日本ジオパーク委員会,（2013）,第 18 回日本ジオパーク委員会審査結果報告書

[18] アポイ岳ジオパークガイド名簿（2018）、2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。

3　アポイ岳ファンクラブ

3-1　盗掘問題とファンクラブ設立

第 3 章では、アポイ岳ファンクラブについて、設立の経緯と果たしている役割を整理する。この組織はアポイ岳に関する知識レベルが非常に高い地域住民を中心とした集団であり、植物の分野を中心としてアポイ岳ジオパーク運営に多大な貢献をしている。

アポイ岳ファンクラブの設立は 1997 年、高山植物の盗掘問題がきっかけである。初期メンバーの多くは図書館講座などの学習会に参加者しており、地域の問題に対する意識が高いメンバーだった。様似町では 1996 年と 1997 年の 2 年連続で固有種ヒダカソウの大量盗掘が起こった[19]。これは転売目的の園芸業者によるものとみられている。ファンクラブは、「行政の対応の不備を糾弾するだけで終わらせるのではなく、自分たちでできることをやろう」という思いから始まった。したがって、「行政に物申すことができるようにする」、「お金をもらわない代わりに口出しも受けない」ようにするため、行政の補助金は受け取らず、活動は全てボランティア、必要な道具は会費からの購入や寄付などで賄っている[20]。

盗掘防止パトロールなどの活動により大規模な盗掘は起こらなくなったが、ヒダカソウの数は思ったように回復しなかった。これは地球温暖化などによる生育環境の変化が一因ではないかと考えられている[21]。現在は渡邊（2001）などの研究成果をもとに笹刈りなどの作業を行い、生息域をかく乱することで高山植物が生育しやすい環境を作る等の試みが行われている。

ジオパークの理念を様似町で最初に知り、アポイ岳ジオパークの認定に向けて活動してきた中心人物の一人である水野洋一さんは、アポイ岳ファンクラブのメンバーは重要な「仲間」であると語っている。

> ジオパークとか、（中略）私がこう、けしかけたみたいなところだけど、私にも、やっぱり仲間がいないと。私 1 人で思っても、さっき言ったでしょ、図書館に来てって言った時に、そういうときに何気なくぱっと行って、「もうしょうがねえな、行くわ」っていう、そういう仲間。それが今言った、アポイ岳ファンクラブというのがある[22]。

住民が継続的に活動を行うにあたっては、個人の力では限界がある。20 年以上にわたり続いてきたファンクラブは、高山植物の保全において非常に重要な役割を果たしたといえる。

---

[19] 様似町教育委員会，(2008)，日本ジオパーク認定申請書　アポイ岳ジオパーク
[20] 2021 年 10 月 19 日、登山道整備同行時のフィールドノートおよび信太富夫さんへの聞き取りより。
[21] 2021 年 10 月 20 日、田中正人さんへの聞き取りより。
[22] 2021 年 10 月 16 日、水野洋一さんへの聞き取りより。

3-2　登山道整備

現在ファンクラブの主な活動は登山道整備である。登山道整備活動の始まりについてファンクラブ現会長の田中正人さんは次のように語っている。

> 登山道がはっきりしないっていうのが元々の問題。どこでも入っていいよと。でも、それは踏みつけとかなっちゃうから。盗掘にも結び付くから、登山道以外は歩かないようにしようっていうのを最初にやった。だからロープ張りとかやってた[23]。

登山道整備は当初登山道とそれ以外の場所を区別するために行われた。また、登山者がより歩きやすいようにするための環境整備や高山植物の生育環境を保つことも目的としており、具体的な活動としてはふとんかご[24]の設置やロープ張りのような登山道の補修作業、高山植物が発芽しやすい環境を維持するために行う笹刈りなどのような作業と、それらの作業に使う道具の荷揚げがある。活動頻度は不定期で夏季が中心だが、荷揚げ作業は冬季にも行っている。

一例として、ロープ張りに用いるロープは 400m で一巻き 10 キロあり[25]、これを上まで運び、取り替えた後持ち帰る作業を数年ごとに行う。かなりの重労働であるため、体力のある人材が少数精鋭で行っているのが現状である。

登山道整備は朝から行われるため、参加者は基本的に様似町内や近隣の市町村に住む会員に限られる。したがって、遠方に住む人は会費という形で活動への寄付を行う場合がほとんどである。

また、アポイ岳における登山道整備の活動場所は、5 合目より下かつ道有林以外の範囲となっている。ファンクラブでは、道有林以外の大半の土地の所有権を持つ王子製紙の同意を得て作業を行っている[26]。

3-3　知識の蓄積

アポイ岳ファンクラブの中核メンバーには、長年アポイ岳に登っている人が多い。そうした経験値の高いメンバーは、経験で得た知識や過去の状態との比較などを学芸員や専門家に教える側になる場合もある。実際に、ビジターセンター所属の地質、植物の学芸員両名はファンクラブ会員に助けられた経験について以下のように述べている。

---

[23] 2021 年 10 月 20 日、田中正人さんへの聞き取りより。
[24] 金網の中に石を詰めたもの。高低差が大きく歩きにくい場所や、崩れやすい箇所に使用する。（2021 年 10 月 19 日、登山道整備同行時のフィールドノートより）
[25] 2021 年 10 月 19 日、信太富夫さんへの聞き取りより。
[26] 2021 年 10 月 19 日、登山道整備同行時のフィールドノートより。

植物は正直、花の名前ぐらいまでしか知らないので、それは信太さんとか田中さんとか、あと水永さんとかから教えてもらったりとか。あとは（佐藤）謙先生とか、ほかの大学の先生が山に行くので、その時にそういう人たちにちょこちょこ質問しては、という感じですね[27]。

谷村さんも毎回山登り助けてくれるし、あっちでなんか重い作業があるとかだと、ついてきてくれるし[28]。

また、アポイ岳に隣接する幌満岳では、登山道が無いため道案内なしに調査活動を行うことは非常に困難である[29]。ここで道案内を担うことができるレベルの知識を持つ地元住民は基本的にアポイ岳ファンクラブの会員である。

また、ファンクラブ会員との連携における、自らと会員それぞれの役割について、歴史担当の学芸員は以下のように述べている。

田村［裕之］さんがやっぱり、地元にいらっしゃる方で、色々詳しくて、まあ歴史にも興味のある方だったので、色々回ったり、色々業務をやる中で教えてもらいながら、それを自分で調べていって、自分の知識にしていった感じです。やっぱり地元の人の経験知とか知ってる知識っていうのは全然外にはかなわないので、それをやって。ただ、なんていうんですかね、自分が研究職としてやってきている研究のプロセスは持っているので、どちらかというと、その田村さんの感覚を、私が研究のプロセスにしていくっていうような役割で、よく連携してやってた部分はありますね[30]。

このようにファンクラブ会員と専門家は、それぞれが持っている知識や経験を共有し合いながらジオパークの活動を展開しており、こうした協力関係がジオパークの運営を支える要因の一つであるといえる。

3-4　本章の小括

第 3 章では、アポイ岳ファンクラブについて取り上げた。アポイ岳ファンクラブは高山植物の盗掘問題に端を発してできた組織で、初期メンバーには図書館講座などで積極的に地域学習を行っていた者が多い。活動は全てボランティアで、現在は主にアポイ岳の登山道整備を行っている。これは高山植物の生育環境を整えること、登山者が安全に登れる環境を作

[27] 2021 年 10 月 20 日、加藤聡美さんへの聞き取りより。
[28] 2021 年 10 月 17 日、水永優紀さんへの聞き取りより。
[29] 2021 年 10 月 17 日、水永優紀さんへの聞き取りより。
[30] 2021 年 10 月 21 日、髙橋美鈴さんへの聞き取りより。

ることを目的とする。また、ファンクラブの中でも特に熟練度の高いメンバーは、自らの持つ経験知を専門家に教える側になる場合もある。

次章では、アポイ岳ジオパークの 3 つのテーマ「ジオ・エコ・ヒト」それぞれに関わる学芸員を軸に、ジオパークで行われている具体的な取り組みを紹介する。

4　ジオパークのテーマと専門員たちが行っている取り組み

4-1　ジオパークのテーマと 4 名の学芸員

アポイ岳ジオパークでは、メインテーマ「地球深部からの贈りものがつなぐ大地と自然と人々の物語」を軸に、「ジオ」「エコ」「ヒト」にまつわる 3 つのサブテーマが設定されている。それぞれのサブテーマは、順に「かんらん岩から大地の変動を学び楽しむ」、「アポイ岳の高山植物から自然環境を学び楽しむ」、「歴史から自然と人間社会の共生を学び楽しむ」である。

第 4 章では 3 つのサブテーマそれぞれについて、各分野の学芸員を軸として、研究者、司書なども含めた専門家や住民との関わりを取り上げる。なお、様似町には専門員として 4 名の学芸員と 2 名の司書が配置されており、全員が様似町以外の出身である。また、所属についても地質と植物の学芸員が様似町役場商工観光課所属でビジターセンターを拠点としている一方、歴史、アイヌ文化担当の両名は様似町教育委員会の所属である。このように自然史系と文化系の学芸員では位置づけが異なり、それぞれ求められる役割に違いがある。

なお、地質、植物担当の両名は、研究者向け宿泊施設の「アポイ岳調査研究支援センター」に滞在する研究者との連携やサポートも行っている。この施設の主な利用者はかんらん岩や高山植物、天然記念物に指定された蝶であるヒメチャマダラセセリなどの調査を行う研究者である。

4-2　ジオ　かんらん岩を分かりやすく伝える

ジオパーク 3 つのテーマの 1 つ目の「ジオ」については、かんらん岩がテーマとなる。

地質の学芸員はジオパークの普及と教育研究を目的として 2012 年に配置された[31]。それから現在まで、北海道の地質を専門とする加藤聡美さんが学芸員を務めている。主な仕事はビジターセンターの展示作成、教育、調査研究、ツアーづくりなどで、2-1 で触れた JGC の関係で他地域のジオパーク再審査に携わることもある。

地質はジオパークの核となる要素である。したがって、地質担当は学芸員 4 名の中でもっともジオパーク関連業務の比重が大きい立場である。その一方、アポイ岳を構成するかんらん岩は世界的に見て珍しい存在であること、説明のためにある程度の文章量や専門用語が必要となることから、解説も難易度の高いものになりがちである。

様似町民は「かんらん岩」という名前にこそ馴染みがないものの、家の庭石や昆布干し場に使われているほか、学名「オリビン」を日常会話で用いており訪問した研究者を驚かせた。これは東邦オリビン工業株式会社の事業所があることに由来する愛称である（加藤 2018）。これについて次のようなエピソードがある。

[31] 2021 年 10 月 20 日、加藤聡美さんへの聞き取りより。

かんらん岩でまちづくりみたいな、ジオパークやるって時に「かんらん岩ってワシら見た事がない。そんな石で何がまちづくりだ」っていうから見せたら、「それはオリビンだ」と。で、オリビンはお年寄りもみんな知ってる。その反対に、研究者の人たちは「ずっと年取った人までも学名を知ってるの」ってびっくりして 。

このように、様似町民はかんらん岩の存在や「オリビン」という学名は知りつつも、学術的な背景や希少性については認知されていないという特異な状態だった。

加藤さんは、いかにして難しいことを分かりやすく伝えるか苦心しており、長年様似に通う他の研究者のアイデアを参考にしながら伝え方を模索していると語った[32]。

こういう展示を作る時とかにも、これまでずっと様似に通ってた研究者、本当にいっぱいいて、なんか本当に日本一来る町じゃないかと、たぶん思うんですけど。で、その人たちが昔から水野さんに引っ張られて講演してたので［図書館講座］、そのときはわかりやすい伝え方を、かんらん岩が「チャプチャプカラカラのかんらん岩」とか開発した人がいて、町内の人も「チャプチャプカラカラのかんらん岩」通じてる人がいっぱいいて、それをそのままこのビジターセンターの展示に使わせてもらったりとか[33]。

加藤さんは、専門的にやっている人だからこそ、かみ砕いて伝えることができるのではないかと述べている。こうした研究者とのつながりは、図書館講座時代に培われた関係性が今も残っている例であるといえる。

地質分野はアポイ岳ジオパークの学術顧問である新井田清信氏の研究分野でもあり、親子岩の調査など協同で調査を行う場合もあるという。新井田氏は札幌市と様似町に研究拠点を持ち、アポイ岳ジオパークの学術顧問やアポイ岳地質研究所（愛称・ジオラボアポイ岳）[34]の所長として、ジオパークを学術面から支える人物の一人である。

4-3　エコ　高山植物の調査・保全

ジオパークのテーマ 2 つ目「アポイ岳の高山植物から自然環境を学び楽しむ」に相当する植物担当の学芸員は、様似町の学芸員 4 分野の中で最も早く、図書館講座が始まった頃に導入されており[35]、現担当の水永優紀さんは 3 代目である。主な仕事には植物開花状況などの調査記録、高山植物栽培施設の管理、学校教育、自然観察会の実施、ビジターセンターの来

[32] 2021 年 10 月 20 日、加藤聡美さんへの聞き取りより。
[33] 2021 年 10 月 20 日、加藤聡美さんへの聞き取りより。
[34] 北海道新聞「『様似ジオラボ』活用を」2012 年 10 月 6 日朝刊地方（苫小牧・日高） 28 ページ
[35] 2021 年 10 月 20 日、田中正人さんへの聞き取りより。

館者対応などがある。

植物担当の学芸員が行っている業務の中でも特徴的なのが、春から秋にかけて週に 1 回程度行われる開花状況調査と、アポイ岳の麓にある高山植物栽培施設の管理である。開花状況調査は実際に現地を訪れて植物の状態を記録するものである。定期的に現地を訪れ、経過を観察するこの調査は、当該地域に居住するレジデント型の研究者だからこそできる活動であるといえる。

高山植物栽培施設は水永さんの代から始まった事業で、野生での繁殖が難しいレベルまで個体数が減少しているヒダカソウをはじめとしたアポイ岳に生息する高山植物を栽培し、種子を回収・保存している。ヒダカソウについては北大植物園との協力関係が構築されており、複数の場所で栽培することで、片方が全滅したときのためのリスクマネジメントができる。また、多くの高山植物は生育できる気候が限られているため、より生息地アポイ岳に近い環境下で栽培することで生存率を高める狙いもある。なお、栽培施設では異なる場所で採取した株同士の種子ができることがあるが、自然界に存在し得ない遺伝子を持つ株は研究目的の利用にとどめ、野生に流出させないよう管理を行っている。

アポイ岳の高山植物に関しては古くから研究者が調査に訪れており、現在も北海学園大学の佐藤謙氏、北海道立総合研究機構の西川洋子氏などの研究者との協力関係がある。

植物の担当は、アポイ岳ファンクラブとのかかわりが多いのも特徴だ。ファンクラブ会員がアポイ岳や観音山で行われる開花調査などに同行したり、自分が山に登った際にビジターセンターに立ち寄って学芸員に現況を伝えるなどといった協力関係が構築されている [36]。

4-4　ヒト　町の歴史と今を生きる人々

4-4-1　歴史・埋蔵文化財

ジオパークのテーマ最後の 1 つである「歴史から自然と人間社会の共生を学び楽しむ」には、2 人の学芸員が関係している。

様似町において歴史・埋蔵文化財の学芸員は 2015 年に導入された。これは世界ジオパーク認定審査とほぼ同じ時期である。歴史担当者が置かれた目的はジオパークだけではなく、長年空席だった郷土館の管理者や埋蔵文化財関連業務のために考古学の知識を持つ専門家が必要とされたという側面もある [37]。

歴史の学芸員は様似郷土館が拠点であり、仕事内容は、埋蔵文化財関係、国指定の文化財の保護業務、維持管理業務、郷土館の施設自体の管理、施設の資料の整理、町の指定文化財、講演会の手配、ワークショップ、企画展、小中学校や等樹院との連携など非常に多岐にわた

[36] 2021 年 10 月 19 日、信太富夫さんへの聞き取りや、アポイ岳ファンクラブ会員の谷村利幸さんとのやり取りより。
[37] 2021 年 10 月 21 日、髙橋美鈴さんへの聞き取りより。

る。蝦夷三官寺の一つである等樹院の関連業務として、厚岸町や伊達市と連携する活動もある。また、郷土館では、後述するカンカン講座などのように町内の他施設と連携することを意識した活動を行っている。

様似町において歴史・埋蔵文化財の学芸員は初めての存在であり、ジオパークの一部として展開することも含め、手探りの中多くの事業を行ってきた。髙橋さんはさまざまな場所で行った事業を通じて徐々に郷土館の認知度が上昇してきた手ごたえを感じており、今後は外に向けて発信するだけでなく、郷土館を訪れてもらい、より深く学ぶ人を増やす方向にもっていきたいと語った[38]。

4-4-2　アイヌ文化

アイヌ文化担当の学芸員は2016年に創設された。仕事内容は調査研究と様似に暮らすアイヌ民族のサポートの 2 つに大別される。それに伴い拠点も教育委員会と東様似生活館[39]の2か所となっている。東様似生活館は、様似町のアイヌ民族の団体「様似アイヌ協会」の活動拠点となっている場所である。

アイヌ文化の学芸員である大野徹人さんは17年前「アイヌ生活相談員」として働くために様似町にやってきた[40]。アイヌ生活相談員とは、国と道の補助金を使って自治体で雇用されている職員で、臨時職員や嘱託職員が担う場合が多い。仕事はアイヌ民族の生活相談である[41]。この流れを汲んでいるため、アイヌ文化担当の学芸員は他の分野とは異なる役割を担っているといえる。これについて大野さん自身は以下のように述べている。

> 私はいわゆる博物館などにいる学芸員さんとはちょっと違う位置づけで、「学芸員補」とはなってますが、研究調査もやりつつ、地域のアイヌの人たちがやっている活動の、いわばサポートですね。（中略）なかなか私は研究者なのかというと、まあ、研究者といえば研究者なんですけど。ただ実際に大事なのは、当のアイヌ民族の人たちが、自分達の言語や文化を取り戻すことだと思うんだよね。私の役割は、やっぱりそのお手伝い、サポートだと思うんですね[42]。

このように、アイヌ文化担当の学芸員は元々が研究職ではなくアイヌ生活相談員という立場から派生しているため、調査・研究や教育のような仕事だけでなく、アイヌの人々の相

---

38 2021年10月21日、髙橋美鈴さんへの聞き取りより。
39 生活館とは、社会福祉事業法に基づいて建てられた施設で、何らかの事情で生活基盤の整備が遅れている地域を助ける、公民館に近い機能を持った場所である。北海道では主にアイヌ民族を対象としている。なお、本州では同様の施設が隣保館と呼ばれる。
40 2021年10月21日、大野徹人さんへの聞き取りより。
41 2021年10月21日、大野徹人さんへの聞き取りより。
42 2021年10月21日、大野徹人さんへの聞き取りより。

談を聞く、アイヌ関係組織の活動をサポートするなど、人に向き合う活動の比重も大きい。

様似には「様似アイヌ協会」と「様似民族文化保存会」の 2 つの組織がある。2 つはいわば姉妹団体で、構成員が重複している。前者はアイヌ民族の生活向上や地位向上、権利回復、文化伝承など絵を目的とした組織で、札幌を拠点に全道各地に支部を持つ。後者は様似におけるアイヌ民族の伝統的な踊りを継承するための組織である。大野さんはこれらの団体の事務や外部との取り継ぎなどを担い、活動をサポートしている。

そのほかの業務としては、教育普及のため「岡田のチセ」などで行う解説がある。後述する小中学校の授業などの折に、他分野の専門家と分担して解説を行うことが多いという。

4-4-3　健康づくり

様似町は「生涯スポーツの町」を宣言しており、町民の健康のためにスポーツを推進している[43]。新井田清信氏は、住民の健康づくりとしてのスポーツは広い意味でジオパークの理念である「ヒト」の生活と結びついているのだと語る。

> 地域の健康づくりっていうのは、日本では話題にならない。ユネスコ的には、やっぱり健康づくりが地域の将来の持続的なこれになるっていうんで。（中略）たぶん、単にブランドのお菓子ができたとか。人口が減るのが止まったとかではやっぱり済まされなくて、1 つの指標として「地域の健康な生活を」みたいなやつが指標になってるのが実は大事かなと。それだから世代交代と関係あるの[44]。

ジオパークは地域の自然・文化資源の保全や持続的な活用を目的とする取り組みである。この前提に立ち返ると、地域住民の健康もまた守るべき地域資源の一つであるといえるだろう。

4-5　各分野の連携事業

ビジターセンター、教育委員会の学芸員や、町立様似図書館の司書の三者が連携して行う事業の例として「カンカン講座」がある。これについて郷土館学芸員の髙橋さんは以下のように語っている。

> 要は図書館と、ビジターセンターと郷土館が、それぞれの専門分野をテーマにして、工作ものだったり、遠足ものだったりするんですけど、そういう事業を開催して、一般

[43] 北海道様似町,（2021）,第 9 次様似町総合計画. p 77、様似町役場広報広聴係,（2012）, 町政要覧　資料編　2012（平成 24 年度版） p 2

[44] 2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。

の方達の地域コミュニティの構築とか、知識の蓄積とかを求めるものなんです[45]。

これは町民向けの事業で、3 館それぞれがその日のテーマに関連するワークシートを作成している。参加者はファイルにワークシートを綴じることでどんどん知識を蓄えていくことができる。

また、小中学校の授業や学校登山などでは、各分野の担当者が分担して解説を行うこともある[46]。場合によっては学芸員だけではなく、ジオパークガイドを務めるファンクラブ会員が参加する場合もある[47]。

このように、教育の場面では各分野の学芸員や、ジオパークガイドを務めるファンクラブ会員など、様々な立場の人々が協力・分担して活動を行っている。

4-6　本章の小括

第 4 章では、学芸員の活動を軸にアポイ岳ジオパークの 3 つのテーマ「ジオ・エコ・ヒト」それぞれについて取り組みの例を挙げた。ジオ、エコはアポイ岳のかんらん岩、高山植物についてビジターセンターの学芸員 2 名が担当している。「ヒト」が取り扱う領域は町の歴史や、アイヌを含めた今を生きる人々など、非常に幅広い。各学芸員の基本的な業務として、調査研究や教育活動が共通しているほか、分野ごとに特色ある活動が行われている。教育普及活動に関しては、他分野の専門家やファンクラブ会員と協力して解説を行う場合もある。

次章では、数年後、数十年後を見据えたときに直面するであろう人材確保の問題を取り上げ、ジオパークの活動を継続的に行っていくために必要となることについて考察する。

[45] 2021 年 10 月 21 日、髙橋美鈴さんへの聞き取りより。
[46] 2021 年 10 月 21 日、髙橋美鈴さん、大野徹人さんへの聞き取りより。
[47]2021 年 10 月 19 日、信太富夫さんへの聞き取り、 2021 年 10 月 20 日、加藤聡美さんへの聞き取りなど。

5　ジオパークの取り組みから考える様似町の今後

5-1　後継者問題

様似町では人口減少と高齢化が進んでおり、特に 15～64 歳の生産年齢人口のうち若年層の減少が顕著である一方、65 歳以上の老年人口は増加している。これについて町は、学卒者の都市部への流出や受け皿となる職場の不足で、15～39 歳のUターン人口が少ないことが要因ではないかと推測している[48]。

今回の調査でも、アポイ岳ファンクラブと様似民族文化保存会（以下、保存会）について後継者不足で将来的に活動が行えなくなる、あるいは縮小せざるを得なくなると危惧する声があった。

保存会の現状についてアイヌ文化担当の学芸員大野徹人さんは以下のように述べている。

> 「アイヌ民族自身による活動」はさっき言いましたように高齢化の問題があって、なかなか会の存続も危ういんじゃないかという心配があることなんです。踊りの会（保存会）などは 20 人前後ですけど、ほとんどが 60 代、70 代、80 代なんですよね[49]。

若年層の人口流出に加え、アイヌ民族が直面してきた差別や偏見から逃れるために「自分がアイヌであること」を公表せず暮らしている人もおり、アイヌ民族の血を引いていても組織に参加しない事を選ぶ人もいる。

また、アポイ岳ファンクラブの若年層について、役員を務める田中正人さん、田村裕之さんは以下のように述べている。

> ――ファンクラブのメンバーで年齢層が若いのって、学芸員の方以外にいらっしゃるんですか？
> ほとんどいないっちゃいないな。ちょこちょこいるのかもしれないけど。普段参加する中ではいないに等しい[50]。

> 寄付代わりに会員になって応援しますっていう方がいらっしゃる。その中には多分若い方が何人もいらっしゃるんですけど、実動部隊ではないので。実働部隊としては全然若い人は[51]。

---

[48] 北海道様似町,（2021）,第 9 次様似町総合計画，p3-4
[49] 2021 年 10 月 21 日、大野徹人さんへの聞き取りより。
[50] 2021 年 10 月 20 日、田中正人さんへの聞き取りより。
[51] 2021 年 10 月 20 日、田村裕之さんへの聞き取りより。

現状ファンクラブ会員約 150 名のうち役員は十数名で、立ち上げ当時のメンバーが大半を占めている。登山道整備などの活動への参加頻度が高いのは基本的にこのメンバーが中心だ。入会に際して会費以外の条件は設けていないが、主要な活動が山で行われる以上、中核メンバーになれる人材には居住地の地理的制約が発生する。また、初期から活動に取り組み、ある種の「スーパーマン」と呼べるような熟練度の高いメンバーが活動を支えている現状が、技術的・体力的な面から「同じようにやるのは難しい」という心理的ハードルを生んでいる可能性もある[52]。

このように、各組織は様似町自体の人口減少以外にも、社会状況や地理的制約など複数の要因により若い世代の後継者が十分でない状況となっている。

後継者問題に明確な答えは存在しないが、聞き取りを行う中で「町内に眠る人材の育成」と「町外の人材を確保すること」をバランスよく行うことが一つの指針であるという意見がみられた[53]。ここからは、それぞれについての現況と方策について考察する。

5-2　町内に眠る人材の育成

5-2-1　町民の中にある意識の差

町内での人材発掘の方法としては、関心の低い層に対して「知ってもらう」機会を提供することや、本人が気づいていない活躍の可能性を発掘し、適材適所に配置することが考えられる。

様似町は非常に活発な社会教育・地域学習が行われている地域である。その一方で、地域学習に取り組むかどうかは個人の意欲や関心の程度に影響されていると考えられる。

調査を行う中で複数の調査対象者から「ビジターセンター来館者には町内の人が少ない」、「様似町民の中でジオパークに対する関心の程度に差がある」などの指摘がなされた[54]。学芸員の水永優紀さんは次のように話す。

> 自然観察会しても、ほとんど町外の人。町外の人はここの良さを語れるのに、町民は語れないっていうのが、今の現状なんですよ。まず、ここに来館する人は、町民はほとんど来ないです[55]。

---

[52] 2021 年 10 月 22 日、橋爪伸恵さんへの聞き取りより。
[53] 2021 年 10 月 20 日、加藤聡美さんへの聞き取り、2021 年 10 月 22 日、橋爪伸恵さんへの聞き取りなど。
[54] 2021 年 10 月 17 日、水永優紀さんへの聞き取り、2021 年 10 月 19 日、信太富夫さんへの聞き取りなど。
[55] 2021 年 10 月 17 日、水永優紀さんへの聞き取りより。

このように町民の中でアポイ岳やジオパークへの関心度が低い人が散見される主な原因として、以下の 2 点が考えられる。

1 点目は教育を受ける機会の差だ。様似町ではジオパークに関連するアポイ岳などの地域資源について学校教育で取り扱い始めてからまだ数年であり、それ以前は町自体のことについて学校で深く学ぶ機会が無かった。小学校の「学校登山」でアポイ岳に登る行事は古くから行われていたが、学校登山はあくまでも全員が登頂・下山をすることが目的であり、アポイ岳のかんらん岩や高山植物に対して学習を行うことはなかったため、「有名な山だなってのは知ってたけど、だからどうしたのっていう」認識であった[56]。こうした状況で大人になった世代は、図書館講座などで積極的に地域学習を行う層と、アポイ岳に関心が無い層に二極化する状況になったと考えられる。また、積極的に学習を行う層の多くがアポイ岳ファンクラブのメンバーであると推察される。

2 点目は、ジオパークが「お金にならない」と考える町民が一定数いることだ。そうした町民の考えが伺えるエピソードとして、以下のような話がある。

> 結構ざっくばらんに言うと、なんか「様似町でお金は生まれないべや」って結構絡まれたりとか。酔っぱらった人に。（中略）やり取りすると、「ジオパークでお金は生まれないべや」みたいな感じで、ちょっと言われたり。（中略）
> ――そういう「お金生まれないべや」っておっしゃる方っていうのは、観光産業でもっと収入が町に入ってくると期待されてたってことなんでしょうか。
> 期待してるっていうよりかは、やっぱり町が力を入れてお金を入れてるって分かってる分、「そのお金をもっと別のところに使えるしょや」っていうのが考え方なのかなと思うんですけど[57]。

> だから、この 4000 人しかいない町で、専門の学芸員 4 人いるけど、私にとっては非常に心強いんだけど、人によっては「なんでそんなにいるんだよ？」と。昔だと学芸員っていったら、ある時はいなかったし、いてもせいぜい 1 人。「なぜそんなに専門員いるんだよ」というのは、さっき言った「産業にもっと金かけろ、産業にもっと金かけろ」［という考えの人たち］[58]。

様似町では漁業をはじめとした第 1 次産業の従事者が比較的多く[59]、ジオパークよりもそうした産業に集中して投資すべきだという意見を持つ町民もいるという。一方で、産業に

---

[56] 2021 年 10 月 16 日、水野洋一さんへの聞き取り、2021 年 10 月 20 日、田中正人さんへの聞き取りより。
[57] 2021 年 10 月 22 日、内海絵美さんへの聞き取りより。
[58] 2021 年 10 月 16 日、水野洋一さんへの聞き取りより。
[59] 北海道様似町,（2021）,第 9 次様似町総合計画、様似町役場広報広聴係,（2012）,町政要覧　資料編　2012（平成 24 年度版）

は興隆と衰退があるため、特定の産業にのみ投資するのはリスクがあるとする意見もある[60]。町の限られた予算をどのように使うかに対するスタンスの違いが、このようなジオパークへの考え方の差として表れていると考えられる。

いずれにしても、アポイ岳やジオパークが守ろうとしているものの価値について「知ってもらう」ことが第一の策となるだろう。

5-2-2　それぞれができることをする

町外の人への対応策としては、観光客への対応、外部団体との連携の 2 点が重要となると考えられる。

観光客への対応において町民ができることとして、ビジターセンターのスタッフとして受付などの業務に携わった経験を持つ橋爪伸恵さんは「詳しい話ができる場所・人まで繋げる」ことを挙げている。

> 町民は、何て言うのかな、ホスピタリティですよね。要するに、お客様に聞いてきてもらって、じゃあどのようなサービスを提供できるかをこう、分配するようなね。そういうことが出来るのが課題だと思う。
>
> まあ、ガイドは専門のガイド専門知識が無きゃいけない。だから、例えば山に登るんだったら信太さんとか谷村さんとかっていう風に、行くところが誰かってを明確にしとけば、別に町を歩いている人がジオパークのこと全部説明できなくてもいいと思いますよ。ジオパークがあって、「あ、もっと詳しいことを知りたかったら観光案内所に行ってください」とか、お風呂入りたいんだったらアポイ山荘に行けばいいとかね[61]。

現状として本格的なガイドができるレベルの者はファンクラブの中でも熟練度の高い、約 20 名のジオパーク公認ガイドに限られている。こうしたガイドを育てることももちろん重要だが、「基礎的な要素や自分にとって身近な領域なら説明できる」という人も対応に当たることができるだろう。実際に、普段はガイドをしていない人物が解説役を担った例として等樹院の住職の話が挙げられている。

> 世界［ジオパーク］になって 4 年たって、世界審査の時に、あ、審査会になると活躍してくれるおじさんがいるんだ。例えばね、等樹院あるでしょ。等樹院の住職と、今住職が変わって息子になったんだけど、等樹院を背負ってる人を連れてガイド行くじゃん。そしたら必ずそこで等樹院の解説してくれる。歴史の背景とか。そういうガイド。
>
> ジオサイトとしては、等樹院っていうのは、そこに連れてきたりすれば、そこにガイ

[60] 2021 年 10 月 16 日、水野洋一さんへの聞き取りより。
[61] 2021 年 10 月 22 日、橋爪伸恵さんへの聞き取りより。

ドがいるのさ。そういうこともあるんじゃないか[62]。

このように、すべてのジオサイトに関する知識を網羅していなくても、各々が自分にできる範囲のことをする、知らない場合はビジターセンターなど解説ができる人の下に誘導するというスタンスを取ることで、ガイドとして活動するまでのレベルには達していなくても、活躍する人材の一人となることができるのではないだろうか。

5-3　町外の人材

敷田（2005）は「よそ者と協働する地域づくり」について検討し、何かをもたらしてくれるという「よそ者期待論」ではなく、地域がよそ者と協働し、よそ者を「うまく使う」ことが重要であると論じている。また、その地域に住みながらも、地域外に出た経験を持っていたり、外部の者との接触で「異質な他者の視点」を獲得した「地域内よそ者」が、地域の変容をもたらす可能性についても触れている。様似町の場合「地域内よそ者」として中核のファンクラブ会員や学芸員などを挙げることができるだろう。

外の人材を取り込むための効果的な手段としては、雇用を生み出すことが挙げられる。実際に、様似町で専門員として雇用されている学芸員らは全員が町外の出身である。専門的な教育を受けた人材を含め、若い世代の雇用の場を確保することは町全体が目指すべき方向であると考えられる。

また、「カメラ目線からの地域の魅力発信」をテーマに様似町で写真展を開催した北海道カメラ女子会や、宿泊施設アポイ山荘で販売するワインを開発・製造している八剣山ワイナリーなどのような外部の組織との連携も存在しているほか[63]、2020 年 6 月から公式 YouTube チャンネルを開設している[64]。このような外部との連携や広報活動の充実は今後も重要な項目になるだろう。

5-4　「町民自身が語れる」ジオパークへ

今回聞き取り調査に応じてくださった方々は、総じてアポイ岳ジオパークが擁する地域資源のすばらしさ、貴重さを語っていた。そして、町民自身が様似に誇りをもって町のことにもっと詳しくなってほしい、生き生きと語れるようになってほしいという声も聞かれた。

アポイ岳ジオパークにおいて現在設定されているジオサイトは、地質学者を中心とした研究者の意見をもとに設定されたものであり、住民にはなじみがない、あるいは何が重要なのかよくわからない場所があるという指摘がなされている。そのため現在、住民側の視点で

---

62 2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。
63 2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。
64 様似町ホームページ、http://www.samani.jp/info/youtube.html（2021 年 12 月 19 日閲覧）

ジオサイトの設計の見直しを行おうとする動きが進んでいる[65]。ジオパークの学術顧問を務める新井田清信氏はこの動きについて次のように語っている。

> 今 11 月になってようやくコロナが終わったから、ガイドの人たちが集まって、それぞれのサイトで何を語りたいのか、そういうジオサイトのいわばリニューアル化というか、新しい設計の見直しっていうか、いろんな言い方をしてるんだけど、要するに将来もっと楽しくガイドできないかっていうのをかけて、彼らやりだしたんだわ。(中略)
>
> それで田村さんは、意図的に、「これに新井田さんが入らない方がいい」って言うから入ってないの。ここで新井田さんが一言言ったらみんな影響して、5 人くらいこっちになびいたり、そういうことはやめて。この冬場掛けてそれに徹すると。
>
> そして水野さんとか何人かのリーダーたちが、それなりに原稿みたいなのを、気持ち新たに。これにあるジオサイトの説明じゃなしに。そういう「何を語りたいか」っていうことを、この 10 年間やってきた、そして将来の 10 年間くらいを見据えながら、そういう活動を来年春から。で、それには新井田さんは必ず付き合えと。それで、どうなのかとか抜けてるところはないかとか、チェックを入れる奴には新井田さんが必要だって言われてるのさ。「わかったわかった」って言って。今月のやり取り[66]。

このように、2021 年現在進行中であるジオサイトの見直し計画では、「専門家である新井田先生が関わるべきところ」と「住民自身で考えるべきところ」を区別して見通しが立てられている。これは 1-1 で言及した敷田ら（2006）が理想としている、「解決力向上モード」の在り方であり、町民自身が考え、必要に応じて適宜専門家の知識を活用する体制が確立されているといえる。

ジオパーク登録地域になってから、小中連携の学校教育カリキュラムも始まっている。10 年、20 年先、彼らが町を担う時代には、「様似町のことを丸ごと語れる」人材が増えていることが期待される。

5-5　本章の小括

第 5 章では、ジオパークの活動を今後も継続的に行うために必要となる人材確保の問題について論じた。アポイ岳ファンクラブや様似民族文化保存会などが直面しつつある後継者不足の問題に絶対的な答えは存在しないが、一つの視点として、「町内に眠る人材の育成」と「町外の人材を確保すること」をバランスよく行うことが重要であるといえる。

現在の様似町は地域学習に積極的な層とあまり学習機会がなかった層の差、あるいは町の限られた予算をどのように使うかに対するスタンスの違いから、アポイ岳などの地域資

[65] 2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。
[66] 2021 年 11 月 2 日、新井田清信さんへの聞き取りより。

源に対する価値の認識に差が生まれていると考えられる。目指すべきは全員が完璧に熟知することではなく、少しずつでも知識や関心を持つ人が増えることだ。求められるのは各々の置かれた状況に合わせてできることに取り組み、必要に応じて知識を持つ人に繋げられるようにする対応だろう。また、町外の人材を呼び込むことや、連携を行うことも重要である。

最終的には、より多くの町民が様似町に誇りを持ち、町のことを生き生きと語れる状況が生まれることが理想的である。

6　結論

本稿では、アポイ岳ジオパークの事例を通して、住民が地域に存在する自然・文化資源を保全・活用する活動の中で、専門知識を持つ研究者が地域に関わることにより発生する地元住民との相互作用を検証すること、将来にわたって持続的に活動を行っていくために必要な要素について考察することの 2 点を目的として話を進めてきた。

第 2 章ではジオパークという概念の整理と、様似町においてジオパークが推進されることとなった経緯を整理した。様似町は「マントルそのままのかんらん岩」が見られる地質学的に重要な場所であるため、地域資源の利活用を目指す試みの中でも地質を中心とするジオパークに適した地域であるといえる。

第 3 章ではアポイ岳ファンクラブについて論じた。アポイ岳ファンクラブはボランティアとして活動している民間組織で、アポイ岳の登山道整備などの活動を行っている。メンバーはアポイ岳や地域の自然資源に関する興味、関心が非常に強く、ジオパークガイドが育つ基盤となった。また、経験知を活用し、専門家とともに調査・研究に携わる者もいる。このように、ファンクラブのメンバーはアポイ岳ジオパークに必要不可欠であるといえる。

第 4 章では、ジオパークのテーマ「ジオ・エコ・ヒト」を軸に、地質、植物、歴史、アイヌ文化の各学芸員が行っている活動について述べた。それぞれが外部から訪れる研究者やファンクラブ会員など、様々な相手と協力して調査・研究や教育普及活動を行っている。

第 5 章では、今後も活動を継続していくために必要なこととして、町内外の人材をバランスよく発掘・育成し、適材適所で活躍できるようにすることを挙げた。町民の中で生まれているジオパークに対する意識の差については、完璧な方策はないものの、価値を知ってもらうことが第一歩となるだろう。

冒頭で述べたように、今回の調査で聞き取りを行うことができたのは研究者やファンクラブ会員などジオパークに深くかかわる人々にとどまり、様似町民全体の意見を集約することはできなかった。考察は複数の方からの聞き取りをもとにしているものの、推測にとどまる部分があるため、より実態に迫った調査を行うことが課題として残る。

様似町は世界的に見ても貴重な自然資源、文化資源を持つ町である。町の「良いもの」を皆が生き生きと語れる町を実現するためには、長期的な視座に立った活動を続けることが求められるだろう。

7　謝辞

本稿の執筆には非常にたくさんの方にご協力いただきました。貴重なお時間を割いて聞き取りに協力して下さった 11 名の皆様、アポイ岳ファンクラブの登山道整備活動中に快くお話を聞かせてくださった参加者の皆様をはじめ、様似町の調査にお力添えいただいたすべての方々に心より感謝申し上げます。

特に、様似町役場商工観光課所属の学芸員である加藤聡美さん、水永優紀さん、アポイ岳ファンクラブ前会長の谷村利幸さんなど、調査の起点となったアポイ岳ジオパークビジターセンターで出会った方々には、現地での調査を全面的にサポートしていただきました。本当にありがとうございます。また、アポイ岳ジオパークの学術顧問である新井田清信先生が詳細なお話とともに提供して下さった資料の数々は、執筆において大変力になりました。

さらに、丁寧に指導して下さった指導教員の宮内泰介先生、副査の笹岡正俊先生をはじめとする地域科学研究室の先生方にもこの場を借りてお礼申し上げます。

8　参考文献・参考資料

梶原宏之. (2014). 類似制度との比較からみたジオパークと地理学の役割. E journal GEO, 9(1), 61-72.

加藤聡美. (2018). 住民が郷土を誇りにできる取り組み―住民が主役のふるさとジオ塾―. 地学教育と科学運動, 80, 10-12.

菊地直樹.(2014) .持続可能な地域づくりとレジデント型研究者.農中総研　調査と情報 2014.5（第 42 号）

菊地直樹. (2015). 方法としてのレジデント型研究. 質的心理学研究, 14(1), 75-88.

敷田麻実. (2005). よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究. 江渟の久爾 (50), 74-85, 2005

敷田麻実, & 森重昌之. (2006). 地域環境政策に専門家はどうかかわるか: 地域自律型マネジメントとその実現を支援する専門家のかかわり.環境経済・政策学会年報.(11). 194-209

渡邊定元. (2001). アポイ岳超塩基性岩フロラの 45 年間 (1954-1999) の変化. 地球環境研究, 3, 25-48.

渡辺真人. (2014). ジオパークの現状と課題. E-Journal Geo, 9(1), 4-12.

和田岳. (2005). 博物館における市民を巻き込んだ調査研究: 大阪市立自然史博物館の事例 (< 特集 2> 博物館の生態学-市民と生態学者をいかにつなげるか-). 日本生態学会誌, 55(3), 466-473.

【ウェブサイト URL】（括弧内は最終閲覧日）

「アポイ岳ジオパーク」公式サイトー北海道で登山・花を楽しめる大地の公園 ， apoi-geopark.jp（2021 年 12 月 21 日）

日本ジオパーク委員会，https://jgc.geopark.jp/index.html（2021 年 12 月 17 日）

様似町ホームページ http://www.samani.jp/profile/index3.html（2021 年 12 月 15 日）

・北海道様似町,（2021）,第 9 次様似町総合計画

・様似町役場広報広聴係,（2012）,町政要覧　資料編　2012（平成 24 年度版）

・北海道様似町.（2021）.様似町まち・ひと・しごと創生総合戦略(第 2 期)

【その他参考資料】

・アポイ岳ジオパークガイド名簿（2018）

・様似町教育委員会,（2008）, 日本ジオパーク認定申請書　アポイ岳ジオパーク

・日本ジオパーク委員会,（2013）, 第 18 回日本ジオパーク委員会審査結果報告書